



■巻頭言■

福音讚美歌協会理事 山田洋一（取手聖書教会）

「とりあえず」でない賛美のために

「キリスト教会における会衆讚美の振興に寄与すること」を目的に、この福音讚美歌協会は設立されました。どうして今「会衆讚美の振興」なのでしょう。それは、福音派諸教会にとって「会衆讚美の振興」が差し迫った課題であるからでしょう。賛美音楽は、一番時代の影響を受けるのに、教会の中でどちらかといえば後回しにされてきたことを、現場の牧師として自戒の念を込めて思います。

最近の礼拝音楽の多様化は、教会の真実な求めの中で生まれたものもあるでしょう。でも一方現実として、以前から教会の賛美を支えていた国産のリードオルガンが、値段の高騰、修理技術者の不足、奏楽者の未育成、といった否定的要因から、キーボードや、ピアノに「とりあえず」奏楽楽器の座を譲っていきました。そのときに、どのような楽器が、そしてどのような選曲が礼拝にふさわしいのかの議論は、あまりなかったように思います。以来、ますます急速に多様化する音楽に、教会はきちんとした対応が出来ず、その場その場の「とりあえず」でしのいできた感が否めません。

福音讚美歌協会の使命は「とりあえず」ではない、確信を持って捧げられる賛美のモデルを、ごいっしょに模索し、教会のわざとして提示していくことなのだと思います。教会が喜びと確信を持って賛美の声を上げなければ、福音の前進もありえないでしょう。

これまで教会が精力的に新たな賛美を生み出し「会衆讚美の振興」が起こったときは、教会が霊的な力に満たされていたときでした。16世紀のドイツの宗教改革、18世紀のイギリスのメソジスト運動、19世紀のアメリカのリバイバル運動…。新しい福音のいのちのあるところには、必ず新しい賛美の歌がありました。

今この時代を生きる教会の求めと祈りの中で、「キリスト教会における会衆讚美の振興に寄与する」役割を少しでも担っていくことが出来たらと願っています。

新しい讃美歌の試み「われらの罪をゆるし」

井上義

「救い主に痛みと苦しみをもち死にまで追いやった私！ その私が救い主の血潮の恩恵に与ることができるというのか？ なんと驚くべき愛！」と疑問符と感嘆符の連続するこの"And can it be that I should gain"は、チャールズ・ウエスレーの回心の出来事に由来する讃美歌です。

さて、この有名な讃美歌には、幾つかの違った旋律が施されてきましたが、最も民衆から支持された組み合わせは、今回ご紹介するトーマス・キャンベルによる"SAGINA"という旋律です。エリック・ラウトリーという高名な賛美歌学者は、この旋律を"ugly"つまり「不細工」と形容しました。確かに、旋律学的観点から分析するならば、かなりまとまりの悪い旋律ということになります。実際に歌ってみると、確かに何となく歌いにくいし、何よりも長いので覚えにくい。そう感じられる方も多いことでしょう。しかしこの旋律には、不思議な力があるように感じます。「ワイルドかつパワフル」とも言うのでしょうか。あたかも「回心の感動」あるいは「救いの喜び」といったような言葉にはならない感動の体験を、しかしとにかく熱い思いをもって語ろうとする言葉足らずの信仰者の証のモードに通ずるものを感じます。

われらの罪をゆるし

And can it be that I should gain

SAGINA

詞：Charles Wesley, 1738

曲：Thomas Campbell, 1825



And can it be that I— should gain an in - t'rest in the— Sav - ior's blood?

1 わ れ ら の つ む を ゆ る し こ ころ に 自 由 を も た ら す
2 わ れ ら の み ち を て ら す み こ と ば か か げ て す す む



Died he for me? who caused his pain! For me?— who him— to death pur - sued?

十 字 架 上 の く る し み、 は か り し れ ぬ 主 の い た み
十 字 架 の 主 を あ お ぎ と も に お も 荷 お い あ ー う



A - maz - ing love! How can it— be that thou, my Lord,— shouldst die— for me?

し ょ う り の み さ か ー え あ た う る み か み の あ い を ば た た え う た わ ん
え い こ う は ー 主 に の み あ ー れ み か み の め ぐ み を か ぞ え う た わ ん



A - maz - ing love! How can it be that thou, my Lord, shouldst die for me?

わ れ ら を あ が な う 主 に の み つ ー か え よ
す べ て の い の ち よ 主 の み な あ ー が め よ

この讃美歌の翻訳は『讃美歌第二編』『インマヌエル讃美歌』『ひむなる』『救世軍歌集(別旋律)』等において見られます。形式的に不細工で、ちょっと覚えにくい、しかし、なぜか会衆をとりこにしてきたこの不思議な魅力の旋律ですが、ここに日本語の訳詩が当てられる時、本来の英語讃美歌の時のエネルギーと魅力とが半減してしまうように感じられます。それはなぜか？ と、私なりに考えてみたところ、ざっと次のような三つの点が思い当たりました。

1. 原詩の豊かさ故の、翻訳による意味削減効果。
2. 日本語斉唱における、メリスマ旋律の困難性。
3. 旋律のエネルギーと歌詞のエネルギーの頂点の位置のずれ。

そこで、この試訳におきましては、

1. 原詩の意味はほとんど考慮せず、むしろ「救いの喜び」と「献身」に焦点を宛てた文言を列挙し「新しい歌詞を構成」する。
2. 原詩のメリスマ部分には、歌詞を補充し、日本語における間延びを防ぐ
3. 音楽的なエネルギーの高まる部分には「助詞」ではなく「意味のある単語」を宛てるようにする

以上の三点を考慮して、「新作日本語讃美歌の構築」を試みました。つまりこれは訳詞というよりはむしろ、元の旋律に込められた「信仰のエネルギー」を日本語に受肉させようとする一つの試みです。よって、日本語として、また完結した讃美歌詞としては全く荒削りであり、ある意味「不細工」であると感じます。ですから、これを読んでおられる皆様方には、遠慮なくここに修正や新たな節を加えて頂き、新しい日本語讃美歌創作の一つの試みに加わっていただけますと幸いです。



書評『礼拝と音楽』「新発見 再発見『讃美歌21』保存版」 (日本キリスト教団出版局、2007)

林桂司

『讃美歌21』は、1954年版『讃美歌』にかわる讃美歌として1997年に発行されて、まだ10年の新しい讃美歌集です。本書は、この10年の『礼拝と音楽』に掲載された、『讃美歌21』に関しての記事をまとめたものです。

ちなみに私の仕えている青梅キリスト教会では、2001年4月から礼拝で使う讃美歌をすべて『讃美歌21』に代え、7年が経とうとしています。特に祈禱会では新曲をつとめて歌うようにしてほぼ全曲を歌いました。本稿は『讃美歌21』の書評ではないのでここでは控えたいのですが、『讃美歌21』には不満もあります。だからこそ新しい讃美歌に取り組む必要を感じています。ただ、特に本書を通して、改めて『讃美歌21』の裾野の広さを感じました。

何よりも、『讃美歌21』を支える『礼拝と音楽』誌の存在です。『讃美歌21』を合唱する場合はどうするか、牧師は『讃美歌21』からどう選ぶか、礼拝の中でどう位置づけられるか、高齢者に向けた讃美歌は、等々、この本を見ると、この10年間で実に多くの議論が交わされ、提案がなされたことがわかります。またそうした営みの中から、関連書として『讃美歌21略解』『讃美歌21選曲ガイド』（これは牧師にとって助かります）『讃美歌21』CD（『讃美歌21』の約半分の曲がCD化されました）その他、オルガン曲集、Q&A、点字版などが出版され、『讃美歌21』が十分に用いられるようにサポートしています。また、本書の巻末には年表が掲載されていますが、各地区で『讃美歌21』の発表会が持たれ、各種講習会、CSリーダー訓練、キリスト教学校との懇談会などが催されたことが詳細に紹介されています。

今橋朗氏と小海基氏の対論（69-71頁）では、54年版『讃美歌』の歌詞が吟味され、『讃美歌21』において神学的にどのように変わっているかが編集時をふり返って紹介されていて、非常に参考になりました。例えばこんな議論です。54年版『讃美歌』は、聖霊については「『たまえ』のオンパレード」という点を指摘し、「いつまでも『来てください』だけ」で「聖霊は既に『来てくださった』、だから教会にはこういう責任が生じ、喜びが……というのではない」。『讃美歌21』では、それが改善されたという指摘です。福音讃美歌協会が関わる讃美歌の歌詞はどうあるべきか、十分な議論の必要を感じさせられた有益な対論です。

植木紀夫先生による讃美歌セミナーが、2005年、2007年と聖書学院を会場に行われました。讃美歌セミナーを通して「讃美歌編纂中のこの時こそ、私達が讃美歌評価力を養っておく必要がある」と痛感しました。それで学期内レポートを上記の通りにしました。これは日本で近年出版された4つの讃美歌集がこぞととりあげたヒム・エクスプロージョンの代表的作者グリーンのことです。豊かな内容を持つ原詞に限られた日本語に置き換えられることの難しさ、それぞれの教団教派の違い、訳詞ということについて多くの示唆を受けました。紙面上で詞を掲載できないので残念ですが、最終的に判断したのは「会衆」「会衆歌」としての視点です。「讃美歌の価値を決定しうるのは詩人や音楽家や批判家ではなく教会の会衆である」(由木康『讃美の詩と音楽』教文館184頁) 北海道聖書学院講師 菜花 香

今回4つの翻訳を考察する機会が与えられ、日頃、使われている曲を新たな角度で見つめることで、私たち学生の讃美歌選曲に対する意識が高まったことは大きな収穫でした。

そこで、比較論議してまとめた意見を以下のように類型によって表すこととしました。

- ①『讃美歌21』(日本基督教団、1997年)19番「み栄え告げる歌は」について、会衆歌として歌いやすいという完成度の高さから、類型を「大衆受容・無難型」とし、
- ②『新生讃美歌』(日本バプテスト連盟、2003年)17番「楽の音は高らかに」は、言葉遣いが従来の聖歌・讃美歌の荘厳さを引き継いでいるという点で、類型は「雅楽的・重厚型」。
- ③『希望の讃美歌』(セブンスデーアドベンチスト、2006年)「主をたたえるときこそ」は、教団としての意識と新しい思想が表されていることから、類型は「独自解釈・刷新型」とし、
- ④『聖歌集』(聖公会、2006年)305番は、原詞の思想を拾い上げつつ、より宣教を意識させる点で、類型を「宣教的・原詞忠実型」としました。

4つの翻訳を考察した結果、「会衆歌」という視点から9名中6名が『讃美歌21』『み栄え告げる歌は』を選び、3名が『希望の讃美歌』『主をたたえるときこそ』を選びました。『讃美歌21』は、言葉や旋律の馴染みやすさ、歌いやすさ、若干の差異はあるものの原詞に対する忠実さのバランスが無難にまとまっていると評価され、『希望の讃美歌』は、独自色が目立っても、思い切った翻訳によって教団としての思想を明確にしているという点が評価されました。『新生讃美歌』は、伝統的な重厚さを感じさせる風格を持っており、『聖歌集』は、最も原詞に忠実であり宣教的かつ全体的に明るいと、それぞれに高評価を得た反面、会衆歌としては表現が多少難しく、必ずしも理解しやすい流れといえないのではないかと評価となりました。

総評としては、原詞に忠実であっても広く受け容れられるとは限らないということ。原詞を知らない会衆が「訳しきれない部分」を「流れの悪さ」として感じてしまう懸念があること。その打開策として節を増やすこともできるが、筆者としては5節以上続くと長く感じました。加えて、全節を歌わなければ主旨が伝わらないことも課題であるように感じました。一方で、独自に思い切った翻訳で明確さを得ることはできても、それによって原詞の存在意義を薄めてしまうことにもなりかねません。『讃美歌21』の評価の中にも「原詞で反映されていない部分がある」という意見があったことも無視できないでしょう。改めて「選びたい曲、内容があり取り上げたい曲」であることと「広く受け容れられる」ことのバランスの難しさを教えられました。

北海道聖書学院三年生 中川 昭一 (2008.01.16)

◇第6回 教会音楽セミナー「改めて会衆賛美」を終えて◇ 2008年2月18日【金】13:00-20:00 ■於：金山キリスト教会

名古屋福音伝道教会 三川献児

東海地域では初めての福音讚美歌協会主催による「教会音楽セミナー」が行われ、途中の入れ代わりがありましたので正確な数は分かりませんが、30人を超える教職の先生、信徒の方々が集っていただきました。お迎えする準備委員会としては、どれだけの人々がおいでくださるのか、ほとんど見当もつかない中でのセミナーでしたので、これだけの人々がおいでくださったことに驚くと共に、主に感謝いたしました。



と申しますのも、東海地域においては、どれだけの人々が教会音楽、とりわけ礼拝での讚美について興味を持ってくださっているのかの手ごたえを知ることが出来ない中で準備をしていたからです。これだけの皆様がおいでくださったということは、多くの教会で礼拝をより良く整えたいという願いがあるからでしょうし、新しい讚美歌が生まれるかもしれないという興味もあったことでしょう。

とにかく、セミナーにおいて井上義先生から会衆讚美の姿を教えられ、あらためて教会の信仰の一致、連帯感、信仰の強化に会衆讚美は重要な位置にあることを確認することが出来ました。ルターは「司祭は歌う。ならば会衆も。」と言う名言を残しましたが、井上先生も「説教では眠ることがあっても、讚美の時は眠らない。」「説教は忘れても讚美は覚えている。」のような名言が登場して一堂を沸かしてくれました。



地元からの講演として後藤喜良先生からは、これからの讚美歌に期待することについてお話しをいただきました。バッハの「口短調ミサ曲」のお話から始まり、あらためて福音主義の教会が求める讚美歌の姿を簡潔にまとめてくださり、とても興味深いお話しを聞かせていただきました。もちろん集った皆さんにも「口短調ミサ曲」への情熱も十分伝わったことでしょう。

最後に中山信児先生からは、日本語讚美歌の歌詞の問題について興味深いお話しを聞かせていただきました。私たちが日ごろ慣れ親しんできた讚美歌を通し、作詞の難しさをお話くださると共に、その讚美歌の登場してきた経緯をパワー・ポイントを使って分かりやすくお話くださり、皆さんも時折「お〜っ!」という声をあげつつ聞いていました。何よりも、「みことばの力が心にふき込まれていく讚美歌」の大切さを、先生を通して教えられました。

このような内容でのセミナーでしたが、集ってくださったそれぞれの熱意と興味によって寒さも吹き飛ばすような集まりであったことは確かです。あらためて、準備のためにご奉仕させていただけたことを嬉しく思い、皆様にご報告させていただきます。



このセミナーの準備委員として奉仕して下さったのは、三川献児先生、安西幸夫先生、羽鳥頼和先生、山本陽一郎先生です。心から感謝いたします。（編者）

❖ INFORMATION ❖

第7回 福音讃美歌協会 教会音楽セミナー 「日本語讃美歌の歌詞」

- 日時：2008年6月16日【月】19:00-21:00
- 場所：キリスト教朝顔教会（日本福音キリスト教会連合）
東京都世田谷区松原2-29-19
- 講師：中山信児、植木紀夫
- 合唱：プロジェクト・カルポス

■■■入場無料■■■

第3回 福音讃美歌協会 定期総会

- 日時：2008年7月28日【月】13:00から
- 場所：世田谷中央教会（日本同盟基督教団）
東京都世田谷区桜新町1-14-22

♪ 理事、讃美歌委員をお招きください

福音讃美歌協会の理事、讃美歌委員を、教会の諸集会にお招きください。讃美についてのみことばの学び、実際的な研修や講習などに、ぜひお役立てください。また、福音讃美歌協会の働きについて紹介と報告をさせていただければ感謝です。

例えば、、、 *礼拝メッセージに *祈禱会や諸集会に *讃美についての学びに
*音楽講習会に *近隣教会の合同研修会に

- ・奉仕謝礼は、全て福音讃美歌協会への献金として受け取らせていただきます。
- ・日程と内容について、ご希望をお知らせください。当方で奉仕者を調整の上、改めてご連絡させていただきます。但し、日程、内容によっては、ご希望に添えない場合がありますことを、ご了承ください。

■お問い合わせ・ご連絡先
担当理事：中山信児 TEL&FAX 044-977-8053 sugao-ch@nyc.odn.ne.jp

♪ 讃美歌委員会・協力者募集

福音讃美歌協会の事業のひとつであります讃美歌集編纂につきまして、作詞・翻訳・作曲・編曲・楽譜作成等でご協力いただける方を募集しております。詳しくは、讃美歌委員長の井上義 (info@jeacs.org) までお問い合わせください。

♪ ホームページとメールアドレスが変わりました。

この度、サーバー移転にともない、福音讃美歌協会のホームページとメールアドレスを下記のように変更いたしましたので、お知らせいたします。

新しいホームページ <http://jeacs.org/> 新しいメールアドレス info@jeacs.org

＊会計報告＊

■収入の部■

科 目	2007年度予算案	2007/4-2008/3 実績
会員負担金	1,000,000	855,000
正会員	500,000	500,000
準会員	60,000	60,000
賛助会員	440,000	325,000
自由献金	100,000	336,149
その他	0	98
当年度収入合計 (A)	1,100,000	1,221,247
前年度繰越金	336,363	336,363
収入合計 (B)	1,436,363	1,557,610

■支出の部■

科 目	2007年度予算案	2007/4-2008/3 実績
理事会費	101,500	42,144
委員会費	185,000	73,260
人件費	240,000	240,000
事務費	184,000	67,317
ジャーナル発行費	228,000	236,580
カンファレンス開催費	141,000	180,414
総会開催費	31,000	17,068
予備費	89,500	0
当年度支出合計 (C)	1,200,000	856,783
当年度収支差額 (A) - (C)	-100,000	364,464
繰越額／残高 (B) - (C)	236,363	700,827

【賛助会費納入者】 (2007年4月～2008年3月)

世田谷中央教会、菅生キリスト教会、青梅キリスト教会、鶴ヶ島聖書教会、手稲キリスト教会、栄福音キリスト教会、浜田山キリスト教会、栗橋キリスト教会、キリスト教朝顔教会 (9教会)

大島章義、岡山敦彦、神谷聰子、辻善男、村松容子、石川岩夫、刑部照美、高橋和江、竹中久三、竹中節子、山本緑、安西仁美、小林信人、横倉知恵、三川猷児、稲垣博史・緋紗子、横溝達夫、土井康司 (19個人)

【献金者】 (2007年4月～2008年3月)

こどもの国キリスト教会、武蔵台キリスト福音教会、菅生キリスト教会、高橋和江、村松容子、斎藤眞木子、中山千津子、刑部照美、佐善田鶴子、後藤喜良、尹成奎、匿名、セミナー席上 (13件)

ハシルヤぼうや

by yukinko



イラスト: 1-10

■会員申込み方法■

◇会員の種別は、以下の三種類です。

正会員（教会・教団・教派等）

準会員（超教派団体・グループ等）

賛助会員（趣旨に賛同し支援して下さる教会、個人等）

▽賛助会員のお申し込みは、入会申込書をご請求いただき、必要事項をご記入の上、郵送またはFAXでお送りください。承認後、年会費のお振込みにより入会が完了致します。

▽正会員、準会員のお申し込みにつきましては、協会へ直接お問い合わせください。「入会のしおり」を郵送させていただきます。

◆郵便振替口座◆

番号 00220-1-95127

名称 福音讃美歌協会

◆郵便貯金口座（ばるる）◆

番号 10500-82654721

名称 福音讃美歌協会

◆銀行口座◆

みずほ銀行ユーカリが丘支店

普通預金口座番号 1604668

名称 福音讃美歌協会

From Editor

編集後記

先日奉仕させていただいた教会でビレイヤーズというちよっと変わった名前の集会がありました。クライミング用語では、と思い尋ねると、その通りでした。クライマーが安全のため、に結んでいるロープを地上で操作する人がビレイヤーです。ビレイヤーは、クライマーが登ろうとする時はロープを送り、落ちそうな時はしっかりと握ります。ビレイヤーは、クライマーの安全を握っているのです。信頼できるビレイヤーがいると難しい岩も安心して登ることが出来ます。

初めての場所で、事前の準備なしで登ることをオンサイトと言います。音楽で言えば初見で難曲を弾きこなすようなことです。

福音讃美歌協会も、オンサイトで壁に向き合うクライマーのようなものです。僅かな手がかり、足がかりを捜しながら、未体験の壁を登りつつあります。ロープを握るビレイヤーは、祈り支えてくださっている皆様です。

(な)

福音讃美歌協会 (JEACS)

TEL 03-3428-2388

FAX 03-3428-2380

〒154-0015 東京都世田谷区桜新町 1-14-22

世田谷中央教会内

新しいホームページURL <http://jeacs.org/>

新しいE-mailアドレス info@jeacs.org

発行者・安藤能成 編集者・中山信児